

LD、ADHD等について

「LDとは」

知的発達が遅れはないけれども、認知能力のばらつきが大きく、学習場面で学びにくさがみられる状態をいいます。これは、認知過程がうまく機能していないことによると考えられています。

学習障害の定義（平成11年7月2日 文部省）

基本的には全般的な知的発達に遅れはない。
聞く、話す、読む、書く、計算する、推論する能力のうち、特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。
その原因として、中枢神経系の機能障害があると推定される。

例えば、このようなことで苦労している子どもはいませんか。

聞いたことをすぐに忘れてたり、何度も聞き直す。
文字や行をとばして読む。
自分の言いたいことを表現するのが苦手。
鏡文字になったり、形の整った文字を書くことが苦手。
単語は正しく書けるが、文章の表記では混乱する。
繰り上がりや繰り下がりの計算でのミスが多い。
計算はできるが、文章題でイメージできない。
図形問題が極端に苦手。

このようなつまずきは、特に低学年の場合、一般的にも見られますが、LDによることもあります。LDの場合には、これらのいくつかが学年が進んでも見られます。しかし、それは本人の努力不足や親の育て方によるものではありません。

「ADHDとは」

多動性、衝動性、不注意などの行動特性によって、集団での学習や生活上の困難がある。平均的な発達に比べて、不注意・多動性・衝動性が極端に現れる場合をいいます。

ADHDは**行動の自己コントロール**がうまくいかない状態なのです。(バークレーによる)

ADHDとは、年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、および又は衝動性、多動性を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものです。

また、7歳以前に現れ、その状態が継続し、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定されています。

Attention Deficit Hyperactivity Disorder

= 注意欠陥多動性障害 (アメリカ合衆国精神医学会)

= 多動性障害 (世界保健機関 WHO)

LDやその周辺の子どもの中には、学習上のつまずきとあわせて、次のような状態のある場合があります。

ぼんやりと空想にふける。

指示や話を聞いていないように見える。

じっとしていられなかったり、手遊びが多い。

興奮しやすい。

出し抜けに答えたり、話題を急に変えたりする。

一つのことに、短い時間しか集中できない。

周囲のちょっとしたことに気をとられやすい。

突発的な行動をする。

こうした子どもの中にはADHDと診断されている子どももいます。

「広汎性発達障害（PDD）とは」

Pervasive Developmental Disorder (PDD)

自閉症とそれに近い特徴を持つ発達障害の総称です。

従来、自閉症の多くは養護学校または障害児学級に多く在籍しているとされてきましたが、通常の学級にも、認知力は高いものの自閉症の特性をもつ高機能自閉症と考えられる児童生徒がいることがわかってきました。

<自閉症の3つの特徴>

- ・対人関係、社会性の障害
- ・コミュニケーションの障害
- ・固執性（こだわり）、常動行動（同じ行動を繰り返す）

その他、以下の特徴もあります。

興味のある話題では、聞き手の気持ちに気付かず延々と話す。

微妙なニュアンスやことばの裏の意味がわからない。

感覚が極度に過敏、または鈍感。

新しい場面や刺激の多い環境では、混乱してしまう。

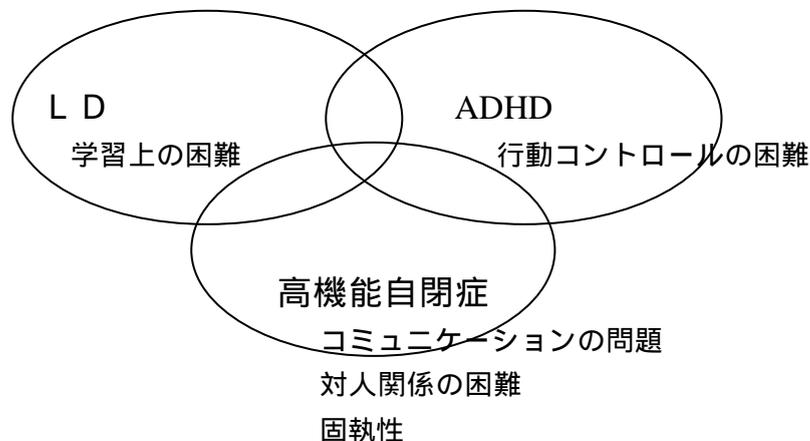
友達との人間関係や行動面でのコントロールが苦手。

身体の運動にぎこちなさがあったり、手指が極端に不器用。

こうした子どもの中には広汎性発達障害（PDD）と診断されている子どももいます。

「高機能自閉症とは」

知的には高いが自閉症の特徴（コミュニケーション、社会性、固執性）があり、独自の世界を持っているので、周囲から理解されにくかったり、集団での学習に学びにくさがある。特に認知能力の高い場合を高機能自閉症、言語の遅れがなく、対人関係以外の困難が目立たない場合は**アスペルガー障害**の診断をもらうことが多い。



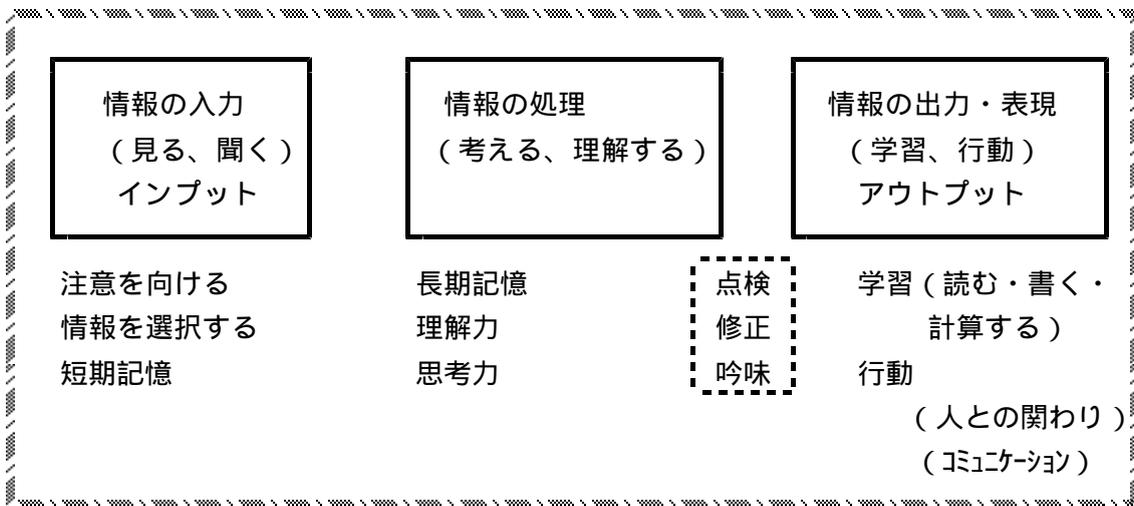
* 個々に異なるけれども、合併しているケースもある

LD、ADHDの子どもたちは、なぜ特別な教育的支援を必要としているのか？

こういった子どもたちは、情報の入力や処理が何らかの要因でうまくいかないために、結果として、学習や行動、対人面などで他の多くの子どもたちと同じように学べないつまずきが起こると考えられています。

その背景として、中枢神経系の機能障害が推定されます。

< 私たちの情報処理の考え方 >



「入力」「処理」「表現」のどの段階につまずきがあるかを把握することによって、その子どもに合った支援方法をつかむことができます。

< つまずき(課題)を把握する方法 >

大部分は、担任の先生や保護者の
行動観察
学習状況
からの気づきがスタートです。

気になる子がいたら、「質問項目」や「チェックリスト」の項目で確かめてみることもできます。

LD、ADHDのある子どもへの特別な援助や配慮

軽度発達障害のある子どもたちは、学習を怠けているのでも、やる気がないのでもなく、その子に固有の認知特性のために、聞く、話す、読む、書く、計算する、推論するなど、特定の能力が十分に発揮できないのです。

このことが正しく理解されず、常識的であっても、その子には不適切な対応をされることにより、自信をなくしたり、情緒が不安定になったり、登校をいやがるようになる子どもも生まれています。

子ども一人一人の「学びにくさ」を正しく理解し、適切に対応することで、本来の力が発揮できるのです。

LDは、“ Learning Disabilities ” の略語ですが “ Learning Differences ” とも言われています。「できない」のではなく、「学び方の違い」(その子に固有の学び方)と理解することが大切です。

子どもを大切にしたかわり

子どもの話に耳を傾け、適切な声かけや働きかけをしましょう。子どもの良さを認め、意欲的で主体的な活動を引き出すようにしましょう。

学校全体でのかわり

学校ではすべての教職員が共通理解を図り、それぞれの立場で関わっていくことが、学級担任の指導をより確かにしていく鍵です。

理解を深めるための校内研修を行ったり、教育相談を実施するなど、学校や地域の実態に応じて取り組みを工夫しましょう。

「学び方の違い」について、校内で検討したり、指導の工夫をしていきましょう。

誰もがクラスの主人公に

一人一人が学ぶ主体であり、存在感が感じられるクラスでこそ、LDのある子どもも本来の力を発揮することができます。

学習環境を整える

落ち着いた学習の雰囲気をつくる。

机の上や身の回りの整理・整とんの仕方に配慮する。

成就感を持たせる

子どものできるところから始める。
小さなことでも認め、できたことは具体的にほめる。

自信を持たせる

子どもの得意なことを認め、自信を持たせる。
得意な面を伸ばし、やればできるという気持ちを育てる。

見通しを持たせる

一日の予定を知らせたり、学習の手順・方法を一緒に考える。
学習に具体的な目標を持たせる。

自律性を高める

具体的な目安を示す等して、自分で判断できるようにする。
係り活動などをやり遂げることができるように工夫する。

援助の仕方を工夫する

子どもにあった課題を取り上げる。
方法を具体的に理解できるようにする。
ことばで説明しながら、実際にやって見せたり、絵や図などを使ったりする。
学習の手順を声に出して確認するように促す。

担任がLDのある子どもを理解するモデルになる

まず担任がLDによる困難点を理解し、適切な対応を示すことが、子ども同士で個性の違いを認め合う一歩となります。

詳細については、[LDリーフレット](#)を参照